



**Data**

監督・脚本: 甲斐さやか

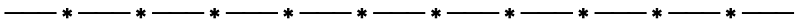
出演: 永瀬正敏/菜葉菜/井浦新/  
佐藤浩市/夏川結衣/吉沢  
健/坂本長利/眞島秀和/  
紺野千春/イモトアヤコ/  
好井まさお

## 👁️👁️ みどころ

弁護士にとって武智鉄二監督の『黒い雪』はワイセツ事件の判例として有名だが、『赤い雪』って一体ナニ? また、高橋伴明監督の『赤い玉、』という面白い映画があったが、その意味の奥深さ(?)に比べれば、『赤い雪』の意味なんてちょろいもの・・・?

そんな「タイトル」が思わせぶりなら、“人の記憶”をテーマとし、現在と30年前の事件を交錯させながら描かれる難解な物語もどこか思わせぶり。“被害者の兄”と“容疑者の娘”との30年後の再会と“対決”は如何に・・・?

新人監督ながら、ビッグネームを起用した大胆な演出はお見事。しかし、私には少し演出過剰気味な面が気がかりだし、2つの疑問点も・・・。それを克服して甲斐監督にはさらに成長してもらいたいものだ。



### ■□『黒い雪』は有名だが、『赤い雪』とは?■□

武智鉄二監督の『黒い雪』(65年)は映倫管理委員会(映倫)の審査をパスし、一般映画館で上映された映画であるにもかかわらず、刑法175条(わいせつ図画公然陳列罪)の罪で起訴されたため、社会的関心を集めた。結果は東京高裁で無罪が確定したが、「チャタレー事件」「四畳半襖の下張事件」「愛のコリーダ事件」と共に判例集にも掲載され、私の司法試験の勉強の格好の素材になった。

それに対して、本作『赤い雪』はワイセツとは無縁の、“雪の日”の“記憶”をめぐる物語。脚本を書き、監督したのは、本作で鮮烈なデビューを飾った若手女流監督の甲斐さやかだ。ちなみに、高橋伴明監督の『赤い玉、』(15年)という、エロじいいを主人公にし、

「みだらに狂ってこそ、映画」をテーマにした作品があったが、そこでの「赤い玉」とはナニ？同作の評論で私は、「赤い玉」の意味、すなわち「赤玉伝説」を知っている人はかなりの教養人、と書いた（『シネマ 36』183 頁）が、さて、あなたはそれを知ってる？そんな難しい概念の「赤い玉」に比べれば、「赤い雪」の概念なんてちよろいもの・・・？

## ■□■テーマは“人の記憶”。それはかなり曖昧！■□■

裁判における弁護士の仕事は、事務所での書面書きと法廷での証人尋問が主な2つだが、証人尋問やその事前の打ち合わせ作業をしていると、人間がいかにかウソをつく動物かということの他、人間の記憶がいかにか曖昧かということを感じさせられる。それはそれでいい（仕方ない）のだが、一番困るのはウソをついているのか、それとも記憶が曖昧なのかの判断が難しいことだ。

本作のテーマは、そんな「人の記憶」。本作のイントロダクションは“人の記憶”について、次のように問題提起している。すなわち、

“人の記憶はこんなにも曖昧で、残酷なものなのか”  
人は、強烈な体験の呵責、苦痛により、その間の記憶をすべて喪失することがある。犯罪者がやっていないと本気で思い込むことで、本当の記憶そのものを失ってしまう事もあると言う。  
また、一種の催眠作用で大昔の忘れていた事があるキーワードで呼び覚まされたり、あるいはそのキーワードによって現在の記憶が空白になる事もある。  
人間を過去から未来へ繋ぐものが記憶だとしたら、その記憶とは実に曖昧であり、人生もまた曖昧といえる。

大学の文学部で心理学を勉強する人にはこれは興味深いテーマだろうが、一般の人にはあまりなじみのないテーマ。それなのに、甲斐監督はなぜそんなテーマに興味を？

## ■□■被害者の兄（永瀬正敏）vs 容疑者の娘（菜葉菜） ■□■

70歳にもなると物忘れがひどくなり、「今日は昼飯を食べたかな」という記憶すらあいまいになることがある。しかし、逆に55年前に見た『メリーポピンズ』（64年）の映画はしっかり覚えているから、『メリー・ポピンズ リターンズ』（18年）を見ると、新旧比較が楽しかった。

「人の記憶」をテーマとした本作では、30年前の一人の子供の失踪事件（殺人事件？）をめぐる“記憶”が具体的なテーマになる。失踪したのは白川家の二人兄弟の弟。そして、その事件の容疑者にされたのが近くに住む江藤早奈江（夏川結衣）だが、結局これは殺人事件として立件されないまま“迷宮入り”になったらしい。失踪する直前まで幼い弟と一緒にだったのは兄の一希。そのため、母親から「弟の状況を説明してくれ」と何度も気が狂ったようにわめき叫ばれたが、一希はその時の記憶を失ってしまったようで、何ひとつ説明できず、途方に暮れるばかりだった。他方、殺人事件の容疑者とされた早奈江は、とっかえひっかえしながら男を家に引っぱり込んで暮らしていたが、その一部始終を、閉じ込

められた押入れの中から目撃していたのが娘の早百合だ。

しかして、本作は30年後の殺人被害者の兄・白川一希（永瀬正敏）と殺人の容疑者の娘・江藤早百合（菜葉菜）の“対決”を軸として描かれるストーリーになっていく。ちなみに、イントロダクションノートでは、そんなテーマの本作を『人間の「記憶」というものの曖昧さ、そしてそんな「記憶」によってしか生きていることを実感できない人間の儚さ・残酷さを、日本の美しい原風景・雪景色に重ね合わせて、観る者の心に突き刺さる映画となっている。』と解説しているのだから、それにも注目！

なお、韓国映画の「ミステリーもの」「犯罪もの」では、暗いグリーン上でじっと何かを見つめる目をアップで映し出すシーンがよくあるが、本作では、母親からひどい虐待を受けている娘・早百合が閉じ込められた押入れの中からじっと部屋の中に目を凝らすシーンが恐ろしい。他方、幼い弟が死亡したことで気が狂ったように泣きわめく母親の側で、弟のことについていくら詰問しても何も答えられない兄・一希の姿も、どこか恐いので、それにも注目！

## ■記者が登場！執拗な取材の中で再会した2人は？■

『止められるか、俺たちを』（18年）の中で、サングラス姿もカッコ良く若き日の若松孝二監督を演じ、その“止められないエネルギー”を見事に表現していたのが、井浦新（『シネマ42』（231頁））。その若き名優が、本作中盤から30年前の事件を追い、一冊の本にまとめ上げようとしている記者・木立省吾役で登場してくるので、それに注目！司法的に未解決のままとなったあの死亡事件を、今掘り返し記事にしようとするための取材の対象になっているのは、今は静かに磁器の色塗り職人をしている白川一希と、今は宅間隆（佐藤浩市）と同居している早百合の2人だ。なぜなら、一希は死亡した弟の兄であり、早百合は容疑者・江藤早奈江の娘だからだ。

スクリーン上は、“あの事件”のことで執拗な取材を迫る木立の姿と、30年前のあの事件の姿を錯綜させながら描かれるが、そこで共通しているのは、暗さと寒さを象徴する雪だ。折りしも、本作を鑑賞する前後の2月9、10、11日の3連休の直前、日本列島は冬型の気圧配置に覆われ、札幌では最高気温でも零下10度以下という記録的な寒さになったが、本作のスクリーン上に見る寒さはそれ以上だ。

降り積もった雪の中、木立は連日のように早百合が帰るのを自宅前で待ち続け、質問を投げかけたが、早百合の口は堅く閉ざされたままだ。他方、木立から30年ぶりの取材を受けた一希は再度あの時の記憶を取り戻そうとしたが、やはり無理。しかし、今は大人になっている早百合に会えば、何か話を聞けるのでは？そして、自分も何か思い出すのでは？そう考えた一希は矢も楯もたまず、木立と同じように早百合に面会を求めることに。そして、やっと早百合に再会した一希はあの時の記憶を聞かせてくれと迫ったが・・・。

## ■俳優の演出も見事だが、少し演出過剰気味！？■

脚本を書き監督をした甲斐さやかが、永瀬正敏や佐藤浩市、井浦新、夏川結衣らの“ビッグネーム”を起用して本作で挑戦したテーマは興味深いし、その演出もお見事。そんな

難解なテーマを貫く舞台として、雪に埋もれた寒村を選んだのも卓見だ。また、木立が嗅ぎまわる現在と、30年前の子役が登場する事件をクロスさせていく演出もお見事だ。

俳優・永瀬正敏にとっては、セリフを極端に抑え、表情のみでさせる演技はお手のものだし、逆に俳優・佐藤浩市にとっては早百合をこきつかうわがまま放題、やりたい放題の大胆な演技(?)はお手のもの。さらに、山田洋次監督の『家族はつらいよ』(16年)『シネマ 37』131頁)、『家族はつらいよ 2』(17年) (『シネマ 40』未掲載)『家族はつらいよ III 妻よ薔薇のように』(18年) (『シネマ 42』未掲載)で、平成の時代の円満な家族を支える理想的な主婦役を演じた女優・夏川結衣は、本作であつと驚く迫力ある演技を見せてくれる。他方、キーウーマンとなる早百合を演じた菜葉菜は私には無名の女優で、美人でないのが特徴の女優(?)だが、本作では一貫してふてくされた姿でストーリーを引っ張ってくれる。

以上のとおり、本作の俳優たちの演技はそれぞれお見事だし、甲斐監督の演出もお見事だが、私の目にはいささか演出過剰気味に映る面も……。もっとも、新聞紙評でも、キネマ旬報2019年2月下旬号の「REVIEW 日本映画&外国映画」(250頁)でも、甲斐監督の達者な演出を評価する人が多いから、そこは好みの問題だろう。

## ■□■私には2つの疑問点が! ■□■

なお、本作がクライマックスに向かう中、私にはその演出に2つの疑問点がある。

その第1は、ある日、連日のように付きまとい執拗に質問を投げかけてくる木立に勧められるままに彼の車の中に早百合が乗り込むのはまだしも、車の中での木立の言葉に激昂して大事故を起こさせ(?)、そのまま木立を車の中に残してしまうシークエンスだ。松本清張の原作で、何度も映画化・ドラマ化された『疑惑』では、猛スピードで海の中に突っ込んだ車の中の夫の死亡につき、妻が保険金を狙った殺人事件ではないかとの“疑惑”が焦点になったが、本作のこのシークエンスで、木立は死んでしまったの?本作では木立はその後全く登場しなくなりストーリーから無視されてしまうことになるが、これは一体ナン・・・・?

疑問点の第2は、クライマックスとなる雪が降り積もる山の中で質問の答えを迫る一希と彼から逃げようとする早百合との追っかけっこ(?)と、そこで早百合の首を絞め殺害しようとする行動が少し不自然で唐突すぎる。また、あそこまでぐったりすれば早百合は死んでしまったのでは・・・?私を含む多くの観客はそう思ったはずだが、その後何とも意外なシークエンスが登場してくるので、それに注目!

その他、本作は韓国映画の名作によく似た雰囲気の問題提起と演出が多く、いかにも大層そうに見えるものの「実はアレレ・・・」という演出に終わっている感もある。小さな映画館ながらかなりの数の観客を動員しており、本作の問題提起性は十分だと思うので、そんな残念な部分をしっかり反省し、甲斐監督には今後さらに飛躍してもらいたい。

2019(平成31)年2月18日記